

日本語母語話者と学習者のほめ表現

—相違から見る学習者の誤用傾向—

A Contrastive Study of Compliment Expressions between Japanese Native Speakers
and Intermediate Learners

吉 成 祐 子

要旨：

本研究は、ほめとその返答を作成する課題により得られたデータのうち、日本語母語話者と日本語学習者のほめ表現を取り上げ、考察するものである。二者間（ほめる人・ほめられる人）でのほめ行動において、何をほめるのか（ほめる対象の種類）、どのようにほめるのか（使用される語、文構造など）を分析する。ほめるという言語行動をおこす話し手（ほめる人）の属性だけでなく、聞き手（ほめられる人）の属性にも注目し、両者の関係性によって言語表現に違いがあるのかを見る。相違点を分析することにより、文法上の誤用だけでなく、不適切な語彙の使用や語用論的にふさわしいとはいえない、学習者のほめ表現を指摘し、誤用傾向を探る。

1. はじめに

日本語教育の現場において、「依頼する」「誘う」という言語行動は注目され、その際の文型や会話例が初級教科書に取り入れられていることは多い。しかし、相手を「ほめる」という言語行動を一つのトピックとして扱うものはあまりない。例えば初級教科書では、(1) や (2) のように、「もらう」という授受表現を学ぶ際の会話例として「ほめる」という行為が紹介されているにすぎない。

- (1) A：その時計、すてきですね。
B：ありがとうございます。誕生日に父にもりました。
A：いいですね。 (『みんなの日本語初級 I』 p.61)

- (2) A：Bさん、いい辞書ですね。
B：ええ、兄にもりました。
A：いいお兄さんですね。 (『日本語初級 I 大地』 p.62)

これらの会話は、下線の語を入れ替える代入練習として提示されているもので、ほめ表現の例として紹介されているものではない。文法項目を練習するうちに、これが日本語のほめ行動における表現だと暗に提示するものになっている。

ほめる際の表現には、依頼における「～てください」や、誘いにおける「～ませんか」のよう

に、典型的な文型があるわけではない。ほめ表現として決まった文型がないことから、どのようにほめるのかは学習者自身の文化的背景が反映される可能性が高いと考えられる。その場合、文法的には間違っていないが、語用論的には適切とはいえない表現が産出され、(3) のような例があることがしばしば指摘されている。

(3) (先生に対して) 今日の授業は上手でした。

日本語を用いる文化においては、目上への評価を含むほめ表現は失礼にあたり、避けられる。「今日は勉強になりました」「よくわかりました」のような、自分のためになったと伝えることで、相手の行為をほめるという手法が用いられる(川口・蒲谷・坂本1996)。しかしこれは、学習者にとって知る機会がなければ習得し得ないものである。

さらに、誤用ではないが、(4) のような助詞の使用は注意を要する。助詞「は」は「今日」を取り立てることにより、「今日だけかわいい (いつもはかわいくない)」という意味に解釈される可能性がある。

(4) 今日のスカートは、かわいいね。

以上のように、聞き手を心地よくさせることを意図しているはずの「ほめる」という言語行動が、用いる表現によっては、かえって相手の気分を害することもある。本研究では、日本語母語話者や学習者がどのようにほめているのか、両者のほめ表現に違いはあるのか、あるとすればどのような点かに焦点を当て、言語調査で得られた両者の表現を分析する。文化的背景や文法上の難しさもあるほめ表現に着目することは、日本語教育にとっても重要である。見本例となる日本語母語話者のほめ表現を明らかにするだけでなく、学習者の表現を分析することで、学習者が陥りやすい誤用や不適切な表現を探ることができるからだ。

2. 「ほめ」の言語行動に関する研究背景

日本語だけでなく、他言語においても、「ほめ (Compliment)」の言語行動を研究するものは多く、ほめの機能、ほめの表現形式、ほめる人の属性による違いなどが検証されてきた。そもそもほめるという行動は、日常生活において必要不可欠なものというわけではない。必要があるために行われる命令や依頼とは異なり、基本的に、相手との対人関係を円滑にすすめる上で、肯定的な効果を期待して行われる言語行動である。また、ほめる際に用いられる特定の文型はなく、何をほめるのか、どのようにほめるのかは様々であり、ほめる頻度も人によって異なる。とはいえ、ほめの言語行動には一定の傾向が見られることが、先行研究で明らかにされている。

ほめの対象について分析している Herbert (1990)、Holmes (1988)、Manes (1983) によると、ほめる対象となるのは、相手の所有物、外見、能力、性格などである。またそれには男女による違いがあることも指摘されている。これらの分類を元に、日本語や韓国語などについても分析が行われている(大野 2009、金 2012、丸山 1996など)。例えば丸山 (1996) の研究では、日本人大学生を対象とした調査によって、ほめの対象を分類し、所持物や外見についてはほめやすいのに

対し、能力や性格についてはほめにくいことを明らかにしている。

ほめの言語行動で用いられる表現形式についても、各言語での使用傾向を明らかにする研究が行われている。例えば、日常生活におけるアメリカ英語のほめ表現を聞き書きによって収集した Wolfson & Manes (1980) では、ほめには形容詞と動詞が用いられ、直接的なほめの語彙は限定的で、nice, good, pretty などの語彙の使用頻度がとても高いこと、そして、ほめの文型には、NP is/looks (really) ADJ¹ (e.g. Your bag is cute.) のような、使用頻度の高い型というものがあることを明らかにしている。日本語については、熊取谷 (1989) が、ほめの主な表現形式の型を (5) のように、3つにまとめている。

- | | | |
|--------|-----------|-----------------|
| (5) a. | 対象物 + 形容詞 | 例：そのセーターいいね。 |
| b. | 形容詞 + 対象物 | 例：かわいいイヤリング。 |
| c. | 対象物 + 好み | 例：わたし、そのスカーフ好き。 |

具体的にどのような表現形式がどのくらい用いられているのかを明らかにするため、林・二宮 (2004) では、ほめる場面を提示し、その際の言語表現を書き込む質問紙調査を行い、女子学生のほめ表現の出現頻度と表現に対する好感度を明らかにしている。その中で、「やさしい、楽しい、話しやすい」がほめ表現としてよく選ばれていることを報告している。

言語別にはほめの表現を分析するだけでなく、対照研究を行うことにより、文化によって異なるほめの言語行動や表現形式を明らかにしようとするものも多い。例えば、Chen (1993) は英語と中国語、金 (2012) は日本語と韓国語のほめ表現を比較し、共通点・相違点を見いだすことにより、各言語の特徴を明らかにしている。第二言語習得の観点から、母語話者と学習者のほめ表現を比較分析するものや、学習者の表現に着目したものもある。以下に、日本語学習者のほめ表現を取り上げたものを紹介しておく。

山口 (2015) は、目上に対する礼状を書く課題で用いられたほめ表現を分析している。留学生の出身地別 (中国、タイ、韓国、台湾) に結果をまとめており、韓国人留学生のみ、直接的なほめ表現が少なく、「いい勉強になった」「新しい経験だった」のように、自分が恩恵を被ったことを表明するストラテジーが用いられていることを報告している。一方、相手に対して直接的なほめ表現を用いていた中国、タイ、台湾からの留学生は「やさしい、ユーモアがある、おもしろい」という評価語を使用し、その使用率は出身地によって異なっているものの、どれも「性格」に言及していることを報告している。これは、留学生がこれまで相手に抱いていた印象よりも実際に受けた印象から、心の距離が縮まり親しみを感じたことを率直に伝えようとして、性格に関するほめに言及したのではないかと考察している。また大野 (2009) では、日本語母語話者と学習者を対象に、目上 (大学教員) に対してほめる場面を提示した質問紙調査を行っている。ほめる対象が異なる場面 (授業、持っている傘、家族、行動) によって、ほめ表現の出現に差があることや、ほめる際に言及する対象は誰か (相手、自身、第三者) による違いがあること、また、ほめる際に用いられる表現に違いがあることを報告している。そして、日本語母語話者と学習者の比較において、それぞれ違いはあるものの、どちらの場合も、目上に対する配慮が言語表現にあらわれていることを指摘している。

以上のように、様々な観点から「ほめ」が研究されてきたが、日本語母語話者と日本語学習者

のほめ表現を取り上げた研究に注目すると、対象となっているのは、目上に対するほめ表現が多い。日本文化において目上に対してほめるという言語行動に難しさがあるため、注目されやすいのだろうと推察される。確かに、日本語使用において、二者間の上下関係によって生じる言語使用上の制限は、敬語をはじめとして様々にある。では、上下関係のない同世代間であれば、そのような制限はなく、同世代間に特有のほめの表現形式やほめの対象などはないのだろうか。本研究では、これまであまり注目されてこなかった、同世代間でのほめ表現に焦点を当て、どのようなほめ表現が用いられるのか、それは日本語母語話者と学習者では異なるのか、さらに、ほめる人（話し手）とほめられる人（聞き手）の関係性にも注目し、両者のほめ表現を分析する。

3. ほめ表現の調査

3.1 調査の概要

本研究で分析するほめ表現は、ほめとその返答を作成する課題によって得られたものである。調査は、岐阜大学で筆者が担当する日本人学生と留学生の合同授業において、4学期にわたって行われた。参加者は、日本人学生（JL1）55名（男性 28名、女性 27名）、留学生（JL2）43名（男性 23名、女性 20名）である。留学生は、岐阜大学日本語研修コースで日本語を学ぶ、中級レベルの学習者である。出身国は様々で（中国、韓国、タイ、インドネシア、アメリカ、オーストラリア、スリランカ、東ティモール、ポーランド、スペイン）、ほめに関わる文化的背景などの違いも考えられるが、その差異については本研究では取り上げない。

調査において、参加者はランダムに3～4名のグループに分かれ、用紙に右隣の人をほめる発言を3つ記入する。そして、その用紙をほめの対象となった相手に渡し、その人はほめられたことに対する返答を記入する。これにより、3つのほめと返答の表現を収集することになるが、時間内に書けなかった、あるいは思いつかなかった参加者もいた。また、ほめとその返答の全回答は289あったが、ほめる相手の組み合わせはランダムであったため、ほめる人とほめられる人の属性の組み合わせで得られた各回答数は異なる（表1）。

表1. 組み合わせ別ほめとその返答の回答数

ほめられる人 ほめる人	JL1・女性	JL1・男性	JL2・女性	JL2・男性
JL1・女性	12	36	9	24
JL1・男性	18	18	27	21
JL2・女性	29	18	9	3
JL2・男性	17	19	11	18

表1では、JL1かJL2か、さらに男性か女性かの組み合わせ（16通り）において、それぞれの回答数が示されている。ほめ表現を比較分析する対象グループは、①話者がJL1かJL2か、②ほめる人とほめられる人の組み合わせ（JL1×JL1(84)、JL1×JL2(81)、JL2×JL1(83)、JL2×JL2(41)）²にわかれる。さらに各グループ内の男女差にも注目する。このように比較分析するのは、日本語母語話者と学習者ではほめ表現に違いがあるのか、それは相手が母語話者か学習者で違いがあるのか、さらに男女差はあるのかを明らかにするためである。

分析するほめ表現の内容としては、何をほめるのか（ほめの対象）、どうやってほめるのか（ほめの表現形式）に注目する。そして最後に、学習者に見られる誤用の例を検証する。

3.2 ほめの対象

何をほめるのか（ほめの対象）について、これまで様々に分類されてきたが（Holmes 1988、丸山 1996ほか）、本研究では、金（2012）の分類を採用する（表2）。金（2012）の研究対象となっている日本語母語話者の結果と比較することができるからである。

表2. ほめの対象の種類と定義（金2012：127-8）

ほめの対象	定義
所持物	相手が持っている、または身につけている物理的な物。 （かばん、アクセサリなど）
外見	外から見た人の姿、容姿のうち、変わらない、生まれつきの顔や体型などの容貌。 （身長、目の大きさなど）
外見の変化	外から見た人の姿、容姿のうち、一時的に変化した顔や体型、髪型などの容貌。 （ヘアスタイルの変化など）
才能	ある個人の一定の素質、または訓練によって得られた能力そのもの。 （頭の良さ、足の速さなど）
遂行	素質や才能を用いて、何かに達し、成功するために実行する過程や結果。 （成績優秀者への奨学金をもらうための努力、試験での良い成績など）
性格	各個人に特有の、ある程度持続的な、感情・意思の面での傾向や性質そのもの。 （やさしさ、慎重さなど）
行動	性格から現れるようなおこない。あるいは性格が分かるようなふるまい。 （友人のためにお弁当を買う、掃除する行動など）

本調査で得られたほめ表現を、表2を基準に分類し、話し手（ほめる人）がJL1かJL2かで言及率を比較したものが表3である。（ ）内は回答数を示している。

表3. 話し手別ほめの対象への言及率

話し手 \ 対象	所有物	外見	外見の変化	才能	遂行	性格	行動	合計
JL1	15.2% (25)	30.3% (50)	0.0% (0)	23.6% (39)	3.6% (6)	16.4% (27)	10.9% (18)	100% (165)
JL2	12.1% (15)	34.7% (43)	0.8% (1)	14.5% (18)	1.6% (2)	25.8% (32)	10.5% (13)	100% (124)

表3より、JL1とJL2に共通点して、ほめの対象として「外見」に最も言及しているが、「外見の変化」についてはほぼ言及がないことがわかる。ともに外見に関わることでありながら、まったく違う傾向が見られるのは、参加者同士の関係性によるものだと考えられる。本データは、同じ授業を受講している者同士をランダムに選び、収集されたものである。そのため、ほめる人・ほめられる人の間柄は、相手の「外見の変化」がわかるほどの関係ではない可能性が高い。また、

「外見」に言及が多いのも、よく知らない相手だからこそ、目につきやすいのだと考えられる。一方、JL1とJL2で異なるのは、「外見」の次に注目されている対象で、JL1は「才能」、JL2は「性格」に言及することが多い。

男女差については、大きな違いが見られなかった。最も言及の多かった「外見」(JL1:男性 29.8%、女性 30.9%、JL2:男性 35.4%、女性 33.9%)についても、JL1で次に多かった「才能」(男性 26.2%、女性 21.0%)、JL2で多かった「性格」(男性 24.6%、女性 27.1%)についても、大きな男女差は見られなかった。

興味深いのは、本調査の結果が金(2012)の結果と大きく異なっていた点である。日本語母語話者のほめの対象は、本調査では「外見」「才能」の順で高かったが、金(2012)では、「遂行」「行動」「所持物」の順であった。これは金(2012)のデータが、同性・同年齢の友人同士による、20分ほどの談話から得られたものであるという、対象者と収集方法の違いが関わっているのかもしれない。この点を確認するため、本調査のJL1のデータを同性か異性かの組み合わせで違いがあるのかを見てみたところ、「性格」(同性同士 10.0%、異性同士 20.0%)や「行動」(同性同士 15.0%、異性同士 8.6%)の言及において差が見られたものの、言及率が高かった「外見」(同性同士 31.7%、異性同士 29.5%)、「才能」(同性同士 25.0%、異性同士 22.9%)に大きな違いは見られなかった。このことから、ほめる人・ほめられる人が同性か異性かという違いではなく、親しい間柄であるかどうか、金(2012)と本研究の結果の違いに関わっていると予測される。もちろん、データの収集方法の違い、つまり、会話内で得られたほめ表現と、相手をほめる課題から得られたほめ表現であるという違いもある。いちがいに研究手法の違う結果を比較することはできないが、結果を比較することにより、ほめの言語行動において、ほめる人・ほめられる人の親疎関係が関わる可能性が考えられる。先行研究では話し手(ほめる人)の性別の違いに注目されることが多かったが(Herbert 1990、Manes 1983、金 2012)、ほめる人・ほめられる人の関係性の違いも、何をほめる対象とするのかに影響があるのかもしれない。

そこで次に、聞き手(ほめられる人)がJL1かJL2かの違いにも注目する。つまり、ほめる人とほめられる人が、母語話者同士なのか、学習者同士なのか、あるいは母語話者と学習者なのかという、組み合わせの違いで異なるのかを検証する。表4は、ほめる人とほめられる人の組み合わせで、ほめの対象に違いがあるのかをまとめたものである。

表4. 組み合わせ別ほめの対象への言及率³

対象 組み合わせ	所有物	外見	才能	遂行	性格	行動
JL1×JL1	15.5% (13)	23.8% (20)	25.0% (21)	6.0% (5)	15.5% (13)	14.3% (12)
JL1×JL2	14.8% (12)	37.0% (30)	22.2% (18)	1.2% (1)	17.3% (14)	7.4% (6)
JL2×JL1	15.7% (13)	32.5% (27)	10.8% (9)	2.4% (2)	30.1% (25)	7.2% (6)
JL2×JL2	4.9% (2)	39.0% (16)	22.0% (9)	0.0% (0)	17.1% (7)	17.1% (7)

話し手別に注目してみると、話し手がJL1、聞き手がJL1の場合（JL1×JL1）、他の組み合わせグループとは異なり、「外見」への言及率が一番高いわけではなく、僅差ではあるが「才能」のほ
うが高い。しかし、聞き手がJL2の場合（JL1×JL2）、「外見」への言及率の高さが目立つ。また
「遂行」や「行動」の言及が、聞き手がJL1の場合よりも圧倒的に少ない。このような違いから、
話し手JL1のほめの対象は、聞き手によって異なる傾向があるといえる。

話し手がJL2の際にも、聞き手によってほめの対象が異なっている。聞き手がJL1の場合（JL2
×JL1）、「外見」と同じくらい「性格」にも言及している。一方、JL2に対しては（JL2×JL2）、「外
見」への言及率の高さが際立っている。また、他の組み合わせグループと比べても、「所持物」の
言及率の低さが目立つ。表3の結果から、JL1と異なり、「才能」よりも「性格」の言及が多いこ
とが話し手JL2の特徴と見られたが、表4の結果を見ると、それは聞き手がJL1の場合であるこ
とがわかる。このことから、話し手（ほめる人）が誰なのかだけでなく、聞き手（ほめられる
人）が誰なのかも、ほめの言語行動の内容を決める重要な要因となっていることが示されたとい
えよう。次節でどのような表現形式が用いられたかを詳しく見るが、JL2がJL1に対して用いる
語には、「やさしい、親切」といったものがあり、これは留学生に対する日本人学生の態度から得
られた感想だといえる。この点からもほめる人とほめられる人との関係性が、ほめの対象を選
択する際の一つの要因になっていると考えられる。

聞き手別に注目してみると、聞き手がJL1の場合は、話し手が誰なのかによって何をほめの対
象とするのが異なる傾向にあるが、聞き手がJL2の場合は、話し手がJL1でもJL2でも、「外見」
への言及が他よりも際立っていることが見てとれる。この結果は、日本の大学という圧倒的に日
本人学生が多い環境において、様々な国からの留学生を見たとき、外見が目立つということも関
わっている。この背景には、話し手と聞き手の関係が、外見以外にほめの対象となるものが思い
つかない間柄である可能性も考えられる。これも関係性の違いが関わる結果といえるだろう。

3.3 ほめの表現形式

ほめる際にどのような表現形式が用いられているのかを、組み合わせグループごとに見ていく。
ほめ表現では形容詞や動詞が用いられることが多いが、名詞の使用も見られた。それらを使用回
数の多かった順に列挙する。

(6)にまとめたように、JL1がJL1に対してほめる際の言語表現では、33種類の語が用いられて
いた。総数は85で、()内に2回以上使用された各語の使用回数を示している。

(6) JL1×JL1

上手(10)、かっこいい(6)、かわいい(6)、きれい(5)、似合う(5)、やさしい(5)、おしゃ
れ(4)、すごい(4)、頭がいい(3)、うらやましい(3)、話しやすい(3)、明るい(2)、い
い(2)、イケメン(2)、えらい(2)、しっかりしている(2)、素敵(2)、背が高い(2)、セ
ンスがある(2)、やわらかい(2)、朝に強い、髪がさらさらしている、頑張っている、
素晴らしい、清潔感がある、助かる、力が強い、丁寧、努力している、のりがいい、
わかりやすい、私のタイプ、速い

JL1がJL2に対してほめる際には、(7)のように、33種類の語（総数90）が用いられていた。

(7) JL1×JL2

いい(9)、おしゃれ(8)、上手(7)、すごい(7)、かわいい(5)、カッコいい(4)、きれい(4)、似合う(4)、話やすい(4)、やさしい(4)、スタイルがいい(3)、すてき(3)、イケメン(2)、髪が長い(2)、元気(2)、背が高い(2)、丁寧(2)、熱心(2)、ペラペラ(2)、うまい、えらい、おもしろい、キュート、さらさら、ダンディ、手が大きい、長い髪、発音がいい、鼻が高い、フレンドリー、まねしたい、目がぱっちり、ふさわしい

JL2がJL1に対してほめる際には、(8)のように、32種類の語（総数88）が用いられていた。

(8) JL2×JL1

きれい(12)、やさしい(11)、かわいい(7)、カッコいい(6)、いい(5)、親切(5)、頭がいい(4)、上手(3)、似合う(3)、明るい(2)、おしゃれ(2)、おもしろい(2)、元気(2)、さわやか(2)、すごい(2)、スタイルがいい(2)、すてき(2)、得意(2)、熱い、安心だ、旺盛、しとやか、すばらしい、セクシー、積極的、センスがいい、ニコニコ、話しやすい、モデルさんみたい、陽気、わかりやすい、私の模範

JL2がJL2に対してほめる際には、(9)のように、23種類の語（総数44）が用いられていた。

(9) JL2×JL2

かわいい(5)、カッコいい(4)、上手(4)、まじめ(4)、いい(3)、やさしい(3)、頭がいい(2)、きれい(2)、すてき(2)、似合う(2)、イケメン、美しい、男らしい、おもしろい、頑張っている、親切、スタイルがいい、すごい、すばらしい、性格がいい、背が高い、丁寧、話しやすい

3.2節でほめの対象の結果をまとめたが、どの組み合わせグループでも、「外見」に言及することが多かった。用いられる語を見ても、「かわいい、きれい、カッコいい」などが多かった。そして話し手がJL1の時には「上手ですね」のような「才能」に関わる語が、JL2の時には「やさしい、親切、まじめ」といった「性格」に関わる語が多く用いられていることもわかる。

ほめる相手の違いで興味深い傾向が見られたのは、「上手」という語の使い方である。総回答数が異なるので、使用率⁴で比較すると、JL2×JL1を除き、どの組み合わせグループでも「上手」の使用は多かった（JL1×JL1：11.8%、JL1×JL2：7.8%、JL2×JL1：3.4%、JL2×JL2：9.1%）。ただし、「何が上手なのか」という点において、ほめる相手によって違いが見られた。話し手がJL1であれJL2であれ、ほめる相手がJL2の際には、「日本語が上手ですね」のように、「上手」という語の対象は、ほぼ日本語能力についてであった。しかし、ほめる相手がJL1の際には、話し手による違いが見られた。話し手がJL1の場合、使用率が高いだけでなく、「字が上手、会話のリードが上手、まとめるのが上手」などのバリエーションがあった。一方、話し手がJL2の場合は3例のみで、「テニスが上手、ポルトガル語が上手」といったものであった。これは、JL2にとって、「上手」という言葉をJL1に対しては使いづらいものであることを示している。具体例をみると、JL2は、テニスやポルトガル語が上手であることを知っているほどの仲だからこそ、表現できる

内容となっている。一方、JL1が上手と評する内容は、字や会話のリードなど、授業内の活動で知ることができ、よく知る間柄である必要はない。また、このような評価は、日本語を学習中であるJL2にとって、母語話者であるJL1に言いづらいものだろう。つまり、「上手」という評価語をJL2がJL1に対して使用する状況は、より限られものだと考えられる。

「上手」という語の使い方からさらに考察されるのは、話し手と聞き手の関係性である。上手と評される対象が、字や日本語能力のような、一見あるいは一聴するだけでわかるものが多かったことから、相手が他にどんなことが「上手」なのかを知るほどには、お互いの関係性は深いものではないと考えられる。つまり、ほめる人とほめられる人の関係性が浅いからこそ、判断しやすく目立つものが言及されやすく、それが「外見」やJL2の日本語能力という「才能」に目が向けられやすいことに関わっているのだろう。

また、「親切」という語の使用も、ほめる人とほめられる人の関係によるものとなっていた。話し手がJL1の際に「親切」という語の使用はなかったが、JL2では6例の使用が見られた。1例以外はすべてほめる相手がJL1の場合である。これは日本で生活する留学生だからこそ、日々の生活で日本人からなんらかのサポートを受ける機会があり、このような評価を感じやすいのだろうと予測される。つまり、「親切」は性格に関わる評価語であるが、相手からの行動や交流があった上で用いられるものであり、そのような状況になりやすいJL2とJL1の関係性があるからこそと考えられる。

以上、ほめ表現の形式として、使用される語に注目してきたが、ほめに用いられる語の選択には、ほめる人とほめられる人の関係性から生じる評価のしやすさ、しにくさに関わっている、とまとめられる。

次に、文の構成に注目する。話し手がJL1かJL2かで大きな違いがあったのが、「形容詞・動詞＋対象物」（例：いい財布、しっかりしている人）という型の使用率である。JL2ではこの型の使用率が高く（JL2×JL1：20.5%、JL2×JL2：27.3%）、特に「○○な人」「○○な子」のような表現（例：かっこいい人、すごい子）の使用が目立っていた（JL2×JL1：18例中11例、JL2×JL2：12例中9例）。一方、JL1は聞き手がJL1でもJL2でもその使用は少なかった（JL1×JL1：8.2%、JL1×JL2：7.8%）。

なぜJL1ではこのような表現形式の使用が少なかったのだろうか。ほめ表現において、形容詞のみの使用と形容詞＋対象物の使用を比較すると、相手に与える印象が異なることが考えられる。例えば、ほめる相手に対して「やさしいですね」あるいは「やさしい人ですね」と直接伝えた場合の違いを考えると、「やさしいですね」の場合、話し手がその人に対して感じた意見・感想を述べているが、「やさしい人ですね」の場合、その人の性格を断定しているような印象を与えるように思われる。相手を心地よくさせることを意図しているほめの言語行動において、その人の性格を決めつけるような表現は避けるべきだという判断がJL1にはあり、後者のような表現はあまり用いられないのではないだろうか。

JL1の表現で注目されるのは、話し手個人の感想や気持ちを明確に表す表現が多様であった点である。例えば、以下のような表現が用いられていた。

- (10) 背が高いの、まじでうらやましい。わけてほしい。
- (11) グループ活動の時、率先して話してくれて、すごく助かります。

(12) 元気がいいですね。明るくていいと思います。

一方、JL2の表現では、数としては大差ないものの (JL1: 10例、JL2: 9例)、表現のほとんどが「思う」を使った表現であった (9例中7例)。

さらに、強調語 (例: 本当に、すごく、とても、めっちゃ) の使用にも興味深い違いが見られた。JL1が話し手の場合、その使用は少なく (JL1×JL1: 7.1%、JL1×JL2: 1.9%)、JL2が話し手の場合のほうが、使用が多かった (JL2×JL1: 10.8%、JL2×JL2: 12.2%)。この中には、適切とはいえない強調語の使用も含まれていた。例えば、JL2では「いつも笑いながらニコニコ顔なので、とても明るいですね」のように、理由説明からは強調する必要がないと思われるような使用が見られた。また、「○○さん、本当に頭がいいですね」のような使用があり、この発言に至る状況や理由の説明なく用いられた場合、ほめているはずなのに、強調することでかえって失礼な印象を与えてしまうような表現となっていた。JL1での強調語の使用は、上記の (10) や (11) のように、個人の気持ちを強調するとき使用されることが多く、強調語の使用においても JL1 と JL2 との違いが見られた。

3.4 誤用傾向

3.3節の強調語の使用で見たように、表現形式や文法上に間違いはないが、語用論的に不適切だと思われる JL2 の表現がいくつかあった。本調査の JL2 は中級レベルの学習者であったため、表現には文法的な間違いは少なかった。しかし、「太陽でこげた皮膚がセクシーです」「心がやさしい」「そのTシャツの色はすごいですね」のように、使用する語彙や、形容詞の使い方が適切ではないものが見られた。日焼けした肌を「こげた皮膚」とは表現しない。「やさしい心 (を持っている)」や「心優しい (人)」とは言いが、「心がやさしい」という文は適切ではない。また、色について「すごい」と形容する場合、程度が甚だしい、並外れているという意味から、良くも悪くも解釈される表現となる。このようは不適切な表現は JL1 では見られなかった。

また、ほめる理由を説明する回答もあったが、JL1 では (13) のように、相手の「すごい」「優しい」点がどこにあるのかという説明になっているのに対し、JL2 では (14) のように、「いい子」「きれいな女の子」と評価する点と理由が合わず、文全体で違和感があるほめ表現になっているものがあつた。一人暮らしをしているから「いい子」という説明は適切ではない (14a)、「きれいな女の子」は外見を評するものであり、いつもきちんと整理するという行動と関わるものではない (14b)。

- (13) a. 留学しようと思う勇気があつてすごいね。
b. 咳の心配してくれるなんて優しいですね。

- (14) a. 自立して一人暮らしなので、いい子だね。
b. 身回りのものはいつもきちんと整理されて、きれいな女の子だ。

さらに、JL1 では用いられず、ほめ表現としては適切とはいえないものが JL2 の表現には多く見られた。一つは、助詞「は」の使い方である。1節で指摘したように、(15) のような JL2 の表現

では、「は」は対比の意味で解釈されるため、シャツ以外 (15a)、あるいは眼鏡以外 (15b) は良くないという意味に取られかねない。

- (15) a. シャツはかわいいです。
b. 眼鏡は似合いますね。

ほめている内容が同じであるJL1のデータを見ると、(16)のような表現が用いられていた。「形容詞+対象物」という型で表現されたり (16a)、助詞「が」が用いられたりしている (16b)。

- (16) a. かわいいシャツですね。
b. 眼鏡が似合っていますね。

そもそも助詞「は」の使用はJL1の表現においては皆無で、「時計、かっこいいね」のように助詞を省略するものも多かった。このようなJL1が用いた表現方法は、JL2にとってけっして難しいものではない。ただ、このように表現すればいいということを知る機会がなかったのだらうと推察される。

もう一つ、JL2のほめ表現には、内容に違和感のあるものが見られたことを指摘しておきたい。例えば (17) のように、ほめられているとは思えないようなものである。

- (17) a. とても陽気だよね。
b. 朝から元気ですね。
c. 日本語は私より上手だ。

(17a) には、明るく賑やかな性格であることをほめの対象としたいのであらうという意図があることは理解できるが、「とても」という強調語とともに用いられることにより、賑やかすぎるという意味が含意されているように感じられる。強調語の使用が問題だけでなく、相手を直接ほめる表現として「陽気」という表現は不適切だともいえる。例えば「あの人は陽気な人だ」のように、第三者を評するのには問題なく用いられるが、相手に直接「(あなたは) 陽気な人ですね」と告げて、ほめ言葉とすることはほとんどない。(17b) は、聞き手からすれば、ほめられているというよりも、朝からうるさい、と言われているようにもとれる。(17c) は、JL1へのほめ表現として用いられていたものであるが、日本語母語話者が学習者より日本語が上手なのは当然であるため、日本語をほめられたり、さらには学習者よりも上手であると言われたりすることは、JL1に対する適切なほめ表現とはいえないだらう。

上記のような不適切ともいえるほめ表現が、JL2で多く見られたわけではない。状況によっては違和感なく受け入れられるものもあるだらう。しかし少数ではあるが、受講者同士でほめ表現を書くという授業内で行われた課題において、JL2にだけこのような表現が用いられたということが重要である。相手を心地よくさせるためのほめ表現であるはずが、相手に悪い印象を与える可能性がある表現になってしまうこと、それが、JL1ではけっして見られず、JL2にのみ観察されたことは注目すべき点である。

本調査のデータにおいて、JL2では、文法的に間違っていないが、不適切な語彙の使用や語用論的にふさわしくないほめ表現というのが見られた。それをJL1との違いを示すことによって、日本語教育の場にも有用な情報を示すことができるのではないだろうか。誤用の可能性を探り、その要因は何かを、JL1とJL2の表現を対照し、分析することは、言語教育にとっても有益な研究であることを主張しておきたい。

4. おわりに

本研究では、日本語母語話者と日本語学習者のほめ表現を取り上げ、何をほめるのか、どうやってほめるのかという観点から、両者の違いに注目して分析を行った。そして、ほめる人とほめられる人の関係が、言語表現の選択に大きく関わっている可能性を示した。日本の大学で学び、日本で生活する留学生（日本語学習者）と日本語母語話者間で用いられるほめ表現を取り上げ、その環境であるからこそ目立つ点（例えば、日本人とは異なる外見、日本語能力、親切にすること・されることなど）があり、それがほめの言語表現に関わっていることがわかった。

対人関係に関わる言語行動において、様々な関係性（上下関係、親疎関係、ウチソト関係など）が取り上げられ、研究されているが、日本に住む外国人数の増加が進む現状を踏まえると、本研究で取り上げたような、母語話者と学習者という関係性も、一つの指標として、今後より研究が進められていくべきであろう。その点でも、文法的な間違いだけでなく、不適切な語彙や助詞の使用、ほめる対象が文化的に不適切だと思われるような表現についても考察したことは意義があり、今後も注目していくべき課題といえるであろう。

実際には、ほめるという言語行動は一つの表現だけで終わるものではなく、会話のやりとりの中で行われるものである。本研究では言語調査の性質上、もっとも単純なほめとその返答という隣接ペアを作成する状況でのほめ表現を対象としたが、日常行われるほめ行動に注目し、会話のやりとりの中で行われる「ほめ談話」を検証する必要があるだろう。先行研究でも、すでに、会話の中でどのくらい「ほめ」が出現するのか、どのように談話が展開されているのかに注目し、日本語母語話者と学習者間の実験的な自由談話から得られたほめ表現を分析しているものもある（山口 2016）。談話においても両者の関係性に関わっているのか、談話展開における誤用の可能性についても検証する必要があるだろう。今後の課題としたい。

注

- 1 NPはNoun Phrase（名詞句）、ADJはAdjectives（形容詞）を示す。
- 2 表1内の太枠を合計すると、各グループの総回答数となる。その数は、JL1×JL1(84)のように、()にも示している。
- 3 ほめの対象の分類には「外見の変化」もあるが、JL2×JL1の1例しか該当するものがなかったため、表4の項目からは外している。ただし、合計回答数には含めて言及率を計算している。
- 4 使用率は、各グループで使用された語の総数のうち、各語が用いられた割合を示している

参考文献

大野敬代 (2009) 「日本語母語話者と学習者の目上への「ほめ」のあり方：アンケート調査の結果

- からみえる両者の配慮』『早稲田日本語研究』18：60-71、早稲田大学
- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵（1996）「待遇表現としてのほめ」『日本語学』15：13-22、明治書院
- 金庚芬（2012）『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』ひつじ書房
- 熊取谷哲夫（1989）「日本語における誉めの表現形式と談話」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究（2）』97-108、広島大学教育学部日本語教育学科
- スリーエーネットワーク編著（2012）『みんなの日本語 初級Ⅰ第二版 本冊』スリーエーネットワーク
- 林信一・二宮喜代子（2004）「「ほめる」使用頻度と「ほめられる」好感度：女子学生のアンケート調査に見る心理言語学」『山口国文』27：88-96、山口大学人文学部国語国文学会
- 丸山明代（1996）「男と女とほめ：大学キャンパスにおけるほめ言語行動の社会言語学的分析」『日本語学』15：22-35、明治書院
- 山口和代（2015）「留学生の「ほめ」にみられる社会・文化的価値観の影響」『アカデミア』人文・自然科学編、10：137-150、南山大学
- 山口佳子・佐々木薫・高橋美和子・町田恵子（2008）『日本語初級1 大地 メインテキスト』スリーエーネットワーク
- 山口良太（2016）「日本語母語話者と日本語学習者の接触談話における「ほめ」：中国語を母語とする上級日本語学習者を対象として」『語文と教育』30：139-150、鳴門教育大学国語教育学会
- Chen, R. 1993. "Responding to compliments: A contrastive study of politeness strategies between American English and Chinese speakers." *Journal of Pragmatics*. 20-1: 49-75.
- Herbert, R. K. 1990. "Sex-based differences in compliment behavior." *Language in Society*. 19: 201-224.
- Holmes, J. 1988. "Paying Compliments: A sex-preferential politeness strategy." *Journal of Pragmatics*. 12-4: 445-465.
- Manes, J. 1983. Compliments: a Mirror of cultural value. In N. Wolfson and E. Judd (eds.), *Sociolinguistics and Language Acquisition*. Newbury House.
- Wolfson, N. and Manes, J. 1980. The compliment as a social strategy. *Papers in Linguistics*. 13-3: 391-410.